

---

# オタクのキオク

IOTA

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オタクのキオク

### 【著者名】

IOTA

N1652D

### 【あらすじ】

記憶を失くした少年と超シンデレ少女の純愛コメディ

(前書き)

この作品にはゲームや漫画のネタが含まれています。  
わからない人はごめんなさい。

「俺はオタクだ」

自らそんなことを言う奴は少ない。言える奴がいたとしたら、そいつはいい感じに頭のネジがずれているか、自らの姿を理解し、認め、それを暴露する勇気のある”戦士”だ。

「俺はアニメオタクだ」

勿論、俺は後者だ。自分で言つのもなんだがネジはしっかり締まつていてる・・・つもりだ。では何故言えたのか、俺が戦士だから他ならない。しかも何のオタクかまではつきりと口にしたのだ。戦士という称号だけでは、この俺の偉業を表せないだろう。いうならスイパー戦士。しかし、これではまだ足りない・・・・・。

「俺はロリータ大好きの十七歳つ！ ギャルゲー、エロゲーなんでも来いっ！ カわいいおんにやの子が出てるものは全て愛せる！ ミココたん萌えつ！ 萌えつ！ 萌えつええええええつ！」

俺はその瞬間、神化した。

戦士？ なんだそれは？ 安い安い。スーパー戦士？ それなんてエロゲ？ マ オじやあるまいし。

そう、俺は神。アイ・アム・レジェンド・・・・・。

バチンッ

唐突に、光が見えた。

これが後光？ 自分の後光が、激しすぎて、目の前が・・・真つ白だ。

さすが俺・・・これなら、こいつも・・・あれ？ こいつ、なんで泣いてるんだ？

・・・・・

気が付くとベッドで寝ていた。

白いベッドに白い布団、薬品の染み付いた独特の臭い。

「俺ん家じやない・・・」

ぼやけた眼で横を見ると、大きな人影が立っていた。

「お、気付きましたな！？ いやあ～、感動しましたぞ。まさかあんなにはつきり言つとは。この大林、年甲斐もなく興奮してしました」

その大林と名乗った男は学生服を着た、横にも縦にも肥えた大男だった。

笑いながら俺の手を握りぶんぶんと振つていて。微妙に湿つた手の温もりがかなり不快だ。学生服を着てはいるが、その老けた顔はどう見ても学生には見えない。オッサンとかオッチャンとか、そんなあだ名がぴつたりだ。

俺は解放された手を布団で拭いながら、「はあ」と相槌を打つ。「それにしても、あの女はひどいですな。あんなに強く殴るなんて、なんとあなたは気絶してたんですぞ！？」

捲くし立てる大林に「へえ」と応じる。

そこで誰かが力強くドアを開けた。セーラー服でショートヘアー、見るからに気の強そうなツリ目の中年。その少女はズカズカと室内に入ってきて大林を無理矢理脇に押しやり、俺のベッドの真横に仁王の如く立ち塞がり、きつついツリ目をさらに吊り上げて言い放つ。「ばつかじやないのあんた！ あんぐらいで気絶なんて、弱過ぎつ！ 死ねつ！ キモオタつ！ 死ねつ！」

その剣幕に大林は「ひい！」と小さく震えている。小さくなつてはいるがその少女よりずっと大きい。

それにもしても、酷い言われようだ。ここは怒つとくべきだろ。

「なんだあんた？全然わかんないけど、なんか腹立つぞ？」

我ながら頭の悪い怒り方だつた。遺憾の意を表明できたかどうかも微妙だろ。しかしそれはしょうがない本当に何が何やらわざりわからぬのだから。

それでも俺の怒りが伝わつたのか、俯いてプルプルと震える少女。「あ、あんたつて何よ・・・。あんたにあんたつて呼ばれたくないわ・・・」

どうやらあんたと言つたのが気に入らないらしい。

俺が首を傾げていると、世界が回つた。いや、回つたのは俺の首だ。

見ると女の手が見えた。力強く握つた拳は俺の頬にめり込んでいる。

痛い。ちょっと痛い。・・・ん？・・・痛い！否つ！めちゃくちや痛い！？なんでこんなに痛いんだ！？まるで同じ場所を一回叩かれた様な！？ま、まさかつ、『二重の極み！？』この歳で、しかも女が使えるとは、この女只者じやないつ。

「死ねっ！バカっ！死ねっ！」

そう吐き捨てるとい、女は逃げるようどこかに走つて行つてしまつた。

なんてことだ。会つてから一分足らずで死ねと二回言われてしまつた。きっと彼女の口癖は、死ねっ！なのだろう。

頬を擦つていると「四回ですぞ」と大林が近寄りながら言つてくれる。

「まつことに酷いですなあ。青痣になつてますぞ？まつたくあんな女子、幼馴染みじやなかつたらとつくに縁切りしてるでしょう？」「へえ、あんたの幼馴染みなんだ？」

「え？いやいやいやいや。いくら嫌だからつてわたくしに押し付けられても困りますぞ。あんなじやじや馬。わたくしどっちかって言うと大人しいネガネの委員長タイプが好みなのです。もつとも、リアル女に萌えの要素があればの話ですが。ぐつふつふつふつ！」

大林は巨体をくねくね揺らしながら終わつちやつてる事を平然と  
言う。かなりキモイ。さつきのキモオタつ死ねつ件はこいつに言  
つたんじやなかろうか？

「しかし、何か様子がおかしいですか？」  
「まさかっ、記憶喪失ですかっ！？」

「まっさかあ。記憶喪失ってのは過去の事、全部忘れる」とだろ?

俺ガキの頃の事、覚えてるもん」

「ぐつふつふつふつふ、ですよねえ。いやあ、わたくしとした事が  
一瞬、心配しましたぞ」

家族のこと、小学校のこと、中学校のこと、生  
る。しかし、幾つかわからぬ「」ことがあつた。

「…  
…  
…  
で、  
あんた誰？」

・・・・・今なんと?」

暑苦しい真顔を近づけてくる大林。

「いや、だからあたなは誰ですかって？」

「・・・冗談、ですよね？」

「いや、冗談ではないな。あと、さつきの子は何？」ここ病院だよ

「なんだ俺こんなとこいんの？」

「……………」

大柄は奇声と共に俺の頭上にあたたかース一ト川をひたぐりボタンを連打する。

「看護婦つ！ 否つ！ ナースさんつ！ 否否つ！ ナースたん！」

二回も言ひ直してより酷くなつてゐる。それに今は看護婦じやなく

細かいことは言わなくていいが、  
て看護士なんだか

俺は車椅子に乗っていた。

後ろには昨日の暴力少女が優しげな表情でゆっくりと車椅子を押

している。

あの後、医者の問診を受けて記憶に混乱が見られると言われた俺は精密検査のため一週間程入院することになったのだ。

そして次の日、学校帰りといつ暴力少女がお見舞いに来てくれたのだった。

お見舞いに来たよ、なんて言つもんだから何をお見舞いされるのかとビクビクしたが、どうやら通常の意味のお見舞いのようだ。

「本当に何も覚えてないの？」

病院の廊下、彼女は車椅子を押しながら話しかけてくる。

「・・・オッチャンのこととかも？」

「オッチャン？」

「ああ、え、と、大林よ。あの昨日の太つたやつ」

やつぱりな、と俺の得心していると、彼女は悲しそうな顔をして、「あなたが付けたあだ名なのよ。本当に何も覚えていないのね」と言つ。

それに無言で頷いたが、彼女の言葉は正確ではない。何も覚えてないわけじゃないのだ。正確には高校に入学してから今までの記憶がすっぽり抜け落ちてしまつていてるだけらしい、それ以前の記憶はかなり正確に覚えている。子供の頃に遊んでいたロツクマンのドリルマンを倒した後のパスワードまで覚えているぐらいだ。

俺がエアーマンのパスワードを思い出しに掛かつてると、彼女は悲しげな声で訊いてくる。

「あたしのことも、覚えてないの？」

「・・・あ」

そこで疑問が生じた。俺は高校以前の記憶は普通にある。それは医者の問診でも証明済みだ。しかし大林の話ではこの少女は俺の幼馴染みらしい。じゃあ、なんで彼女の事を覚えてないんだ？

「あん・・・、君と俺は幼馴染みなんだよな？」

あんたと言いかけて思い止まり言い直した。自分の経験から何も学ばないほど、愚かではない。

「そうよつ！ 思い出したの！？」

彼女は後ろから身を乗り出して、嬉々とした表情で見つめてくる

が、「いや、昨日、君の言つたこのオッチャンに聞いただけ

「・・・そう」

と俺の返答でまた悲しげな顔に戻る。その横顔は本当に悲痛、これではまるで彼女の方が患者だ。何も悪い事はしていないが罪悪感が込み上げてくる。

俺を乗せて彼女が押す車椅子は病院を出た。そこはいかにも大病院らしい広場だった。沈みかけた夕日が名残惜しげに縁を照らしている。

新鮮な外気を体中に感じながら、

「そういえば、君の名前は？」

とさりげなく訊いてみる。実はずっと訊きたかったのだが、なんとなく訊けずにいた。しかし、彼女は沈黙したまま考えるように俯いてしまった。しばらくしても返事がない。聞こえなかつたのかと思ひ、確認しようとしたら、彼女はようやく口を開いた。

「ゲームしようつか？」

「は？」

意外な返答に俺は呆ける。勿論、彼女の名前はゲームショッカさんではないだろう、この場合、ゲームと呼ばれる行為をしませんか？ つて意味だと思う。そんな俺の理解は周回遅れで、もう彼女はゲームとやらの説明を始める。

「あたしの名前思い出すの、誰かに聞いたり調べたりしちゃダメ」

「・・・それってゲーム？」

我ながらもつともな疑問。

「ううん、そうねえ。じゃあ、期限は一週間、思い出したらあたしの勝ち、思い出せなかつたらあんたの勝ち」

「思い出せなかつたら俺の勝ち？ 逆ぢやないか？」

「それでいいのよ。あたしはあんたが思い出すようにがんばるから。

そっちの方がゲーム性あるでしょ？」

「…と少年の様な笑みを見せる彼女。

「でも、俺が思い出して黙つてるかもしれないぜ？」

「そこまでして勝ちたいと思う？」「

「…・思わねえな」

「じゃあ」どこで言葉を区切り、なぜか頬を赤く染め俯きながら、

「…・敗者は勝者の言つ事になんでも従う」そんなことを言つ彼

女。

俺は小首を傾げながら「まあ、いいよ」と適当に頷く。

「それじゃあ、今からゲーム開始ねっ」「

その時、一陣の風が吹いた、その風を称えるように、木々がざわつく。

「思い出した」

「速つ！…」

風、木、そしてゲーム、彼女の言葉が俺の記憶のトリガーとなつたのだ。

「本当に思い出したの？」

「ああ、ばっちりだ、…・ああっ！消えていく、記憶が薄れていくう！紙とペンをつ！誰か紙とペンをくれ！」

「ちょ、ちょっと待つて！」彼女は肩に掛けていたバックからノートと鉛筆を取り出す、俺はその様子を見ながらも蘇った記憶を留めようと思死だ。確実に知っているのに書けない漢字を思い出す感覚に似ている。

渡された紙にペンを素早く走らせる、縦の線を何本か引いて、横の線も同じだけ引く、できたマス目に黒い点を書いていく。

「できた、完璧だ…・・・すごくねえ？」俺は自慢げに彼女に紙を渡す。

「…・何これ？」俺の力作を見た途端、彼女は眉間にしわを寄せ意味不明といったリアクションをとる。無理もない、きっと信じられないのだ、こんなものを記憶している人間はきっと世界に十人も

いないだろう。

「ロックマン2のパスワードだつ！ ハーマンとウッドマンのだぞ。嘘だと思うなら確かめてみな、あ、ゲームボーイ版のだからな、ファミコン版と間違えんなよ」

「…………それだけ？」 気のせいいか、彼女の顔が引きつって見える。

「え？ ええと、もうちょつとでワイリーステージの中ボスの名前も思い出せそうだ……」

俺が削岩機を武器に使う一等奇抜なボスの名を考えていると、

「この、オ・タ・ク・野郎おおおつ……」

殴られた。

「クイントッ！」

昨日と同じ右頬にグーパンチの重みを感じながら、思い出した中ボスの名前を叫ぶ。

倒されてカラカラと間抜けに車輪を廻す車椅子と、地面にうつぶす俺を交互に一瞥して彼女は足早に去つて行く。

その様子を広場にいた患者達が驚いた表情で見つめている、俺は普通に立ち上がり汚れを払うよう身体を叩いて車椅子を起こしに掛かる、それを見てさらに驚愕する患者達。当然の反応だ、歩ける人間は車椅子に乗つたりしない、これは彼女、否、あの暴力女が「こつちの方が雰囲気出るから乗つて」などと意味不明なことを言つて無理矢理乗られたものだ。

患者達に軽く頭を下げ、誰も乗つていらない車椅子を押して院内に戻つた。

「・・・わけわかんねえよ」

名前も知らない女に二回（二回か？）も殴られた頬を擦りながら苦し紛れの独白を漏らす。

入院生活、経験のある者はわかると思うがそれはかなり退屈だ。

テレビ以外娯楽の無い部屋に閉じ込められて、一日をベッドの上で過ごさなくてはならない、本来身体に異常の無い俺の場合、ある程度自由に行動できるはずなのだが、主治医は俺の紫に腫れた頬を見るや否や優しく諭し、一人部屋への引越しと絶対安静を命じた。

一人部屋になつたのはありがたいが、トイレに行く度に看護士や他の入院患者達の怯えた視線の標的になるのはさすがにキツイ。

まったく、暴力女のおかげで不良患者扱いだ。最悪退院が延びるかもしねれない。

暴力女のことを思い出し憂鬱な気分でテレビをつけるとアニメをやっていた、画面にはやたらカラフルな少女達が所狭しと動き回っている。

「お、今回、クオリティ高いなあ、アニメーター変えたのかな・・・」

「そんなことを呟く俺・・・ん？ 待てよ？ こんなアニメ初めて見るぞ、それにクオリティとかアニメーターとか何を言つてるんだ俺は？ わからない・・・わからないが・・・。」

『次回、ドッキドキ修学温泉旅行、お楽しみに』

気が付くと次回予告まで見入つてしまつていた、そして不思議な充実感が全身を満たしている、異常なまでに続きが気になる。

なんだこの感覚は？ 胸の奥から迸る熱いパトスが込み上げてくる。パトス？ パトスってなんだ？ 俺はおかしくなつてしまつたのか。いや、記憶の混乱つて時点で十分おかしいか。とにかくアニメには何かある、俺の記憶の何があるはずだ。

俺はベッドの脇に置いてあつた袋を漁り、中に入っている携帯電話（俺の物らしい）を取り出し開いてみる、待ち受け画面はさつきのアニメのヒロイン『奈川ミココ』だ。焦つた様に親指を動かし他に保存されていた画像も見てみる、「小澤マチ」、「ロイ・メイリン」、「哀桐・マリア・セイレン」、俺の携帯のメモリーはアニメ美少女で埋まつていた、そして彼女達の名前、好きな食べ物、思い人まで全ての設定がわかつてしまう。

思い出すという感覚ではない、知っているのだ、嬉しいと笑い、悲しいと泣く、それと同じ様に俺の脳みそ奥深くに刻み込まれた、そう、これは本能。

『うやら俺はかなりのアニメオタクだつたらしい。

「・・・うあ～」

自身で自分に引いてしまう、だが引いてる場合じゃない、アニメ、つーかアニメ絵の美少女に俺の記憶を蘇らせる手掛けがあるつ！・

・我ながら嫌過ぎる手掛けだつた。

俺は考えた挙句、ある男に電話することにした、三日まつちの記憶で頼れる男は彼しかいない。

『もしもし、こちら大林ですぞ、オーバー。ぐつふつふつふ・・・かなりうざい、しかしここで切るわけにはいかない、とりあえず探りを入れてみる。

「ドッキドキ修学温泉旅行・・・」

『お楽しみにい～ですな。いやあ～、今回はクオリティが高かつたですなあ～、もうミロコたんの萌えっぷりときたら常軌を逸脱してましたな。それにもチ様の秘密もどんどん垣間見えてきましたなあ～、大林的にはメイリンちゃんとの絡みがもつと欲しいのですが。まあ、それはそうと今週始まるマジキヤルギヤールズの』

やはり知っていた。聞いてもないのに今回の評価や、今後の予想、他の新作アニメの話まで電話の向こうで熱弁し始める大林、常軌を逸脱してんのはお前だよという突っ込みは置いといて、流石としか言ひようがない。

『それで、ハア、次回の、ハアハア、ラブみこが、ハヒイ、ヒイヒイ、どうかしましたかな？ ハアフウ』

興奮したのか疲れたのか、一頬り喋り終えた大林は息を荒らげながらようやく話を振ってくれた。

俺は適当に事情を説明し、明日ありつたけのアニメグッズを持ってきてくれるよう頼む。

『喜んでっ！ この大林しかと心得たつ！ 一次元の世界なら地獄

までお供いたしますぞつ！…』

冷静に考えたら、かなり終わっちゃってる台詞だが、今の俺には妙に心強い。

「お前だけが頼りだつ！ 任せたぞ！ 軍曹つ！」と大尉クラスのノリで命じて電話を切ろうとしたが、『あと、一つ』と急に真面目な声で呼び止められた。

『無理に思い出すことないと想いますぞ？ ゆっくりでいいと思います、ゆっくりで。このワタクシめも及ばずながら協力しますから』『ありがとな』と応じて電話を切つた。

大林、いや、オッチャン……うざいけど良い奴だな。

今日はもう寝ることにした。まだ消灯時間にもなっていないが明日のことを考えると、その方が得策だろう。

「忙しくなりそうだぜ……」

次の日、大林は朝一で来てくれた、学校は何かの振り替えで休みなのだそうだ。勿論、そんなこと俺は覚えていない。

大林は幼稚園児が入れそうな巨大な紙袋を両手に提げていた、その袋には中身を表す様な美少女のイラストが大きく輝いている、まるで兵士の誇りの象徴エンブレム。今の大林は硫黄島に星条旗を掲げる海兵隊員達のように神々しく見えた。

そしてその隣に同じサイズの紙袋がもう一つ、招かれざる客が抱えていた、暴力女だ。

頬を染め、唇を突き出し、そっぽを向きながらエンブレムを隠すようにわざと両手で抱えている。おそらくそんな調子で病院まで歩いてきたのだろう、気持ちはわかる。でもそこまでして無理に来なくてもいいのに。

「あんた、思い出してんじゃないのつー？」

俺がアニメ物資を要求したことを大林から聞いたのだろう、暴力女が怒鳴る。

俺はできる限りの挑発顔で両手を広げ、首を振つて見せる、ささやかな復讐だ。両手が塞がつた状態では攻撃できまいとふんだのだ、しかし甘かつた暴力女は唇を噛み締め睨みつけてきたかと思うと、こともあろうにエンブレム入りの紙袋を俺に向かつて投擲した。

「なあつ！？」

無駄に重量のありそうなそれは、神風の零戦よろしく俺に向かつて飛来する。

結果から言えればそれは俺に命中しなかつた。

縮地、一種の仙術で地面の距離を縮めて一瞬で移動する神業だ、その業が俺の目の前で行われたのだ。

「・・・おい、デレなし女。お痛もほどほどにしとけよ・・・」

その異様に重みのある声の主は大林に他ならない、暴力女が紙袋を投げたときには確かにその隣、入り口付近に立つていたはずなのに、今は病室の中央に居た、まるで最初からそこに居たかのように、大事そうに二つの紙袋を抱えて。その顔は人間のものではない、まさに修羅。

「返事はあああつ！？」

「ひつ、は、はいつ！・・・すいませんでした、調子乗つてました、もうしません、許してください」

大林の怒声にビクッと肩を揺らし、青ざめた顔で素直に頭を下げる暴力女。

「ぶふうーん、まったく最近の若い女子は・・・、ワタクシのコレクションが壊れてたら、ジオランテの触手で陵辱してましたぞ」  
シャレになつてない、この男ならビオランテぐらい召喚できるだろ？。ちなみにビオランテとはゴジラに出てくる薔薇の怪獣だ。

「では、これが約束のブツですぞ、大尉殿。ぐつふつふつふ

穏やかな口調と顔に戻つた大林が紙袋を差し出してくれる。

「ご苦労様ですっ！ 大林元帥っ！」

軍曹から元帥へ、空前絶後の十九階級特進だ、短い上富ライフだつた、泣けてくる。

俺は大林の「コレクション」とやらを漁る、中にはフイギュアやらぬいぐるみやら携帯のストラップやらが詰っていた。勿論、全てアニメ少女のものだ、それら全ての名前がわかつてしまつ俺、しかしその中には記憶の奥を刺激する物はなかつた。

「それは『ある意味三次元パック』ですぞ」

「どうかと思つネーミングセンスだが、的を射ているので何も言わないでおこつ。

暴力女は俺のベッドの上に散乱したコレクションを見て突つ込みたそうに口をぱくぱくさせている、大林の手前、下手な発言はできないのだろう。今度、折檻されたときは大林に助けを求めるよ。俺はそんなことを考えながら一ひとつ田の袋を持ち上げる。

「やたら重いぞ、これ」

「ええ、そつちは『神々の黄昏パック』ですから、重いのは当たり前でしょう？」

そんな知つてて当然みたいな口調で言われても・・・、無駄に仰々しいネーミングだが。

覗いてみると、「ミックやら同人誌やらライトノベルやらがぎつちりと詰め込んであつた。

なるほど重いわけだ。これを見たら、いくら心の広い神様でも黄昏るな。大林は黄昏の意味を知つているのだろうか？

一冊を取りパラパラと捲つてみたが、いまいち心に響かない。やはりこんなことでは思い出せないのか、俺は諦めかけて、最後の袋を開ける。

「ぐつふつふつ、それがお待ちかねの『DVDパック』ですぞ」

その時、暴力女が体を回転させて、

「最後だけ名前普通なのかよつ！」

ビシッと理想的な突つ込みのポーズで間髪入れずに突つ込んだ。我慢していた物が抑え切れなくなつたのだろう。しかし、大林はリアル女の妄言だと言わんばかりにシカトを決め込み説明を始める。

「あなたが絶賛していたアニメのDVDを片つ端から持つて来まし

たぞ、これだけあれば一年は萌えに困らないでしょ？な。ぐつふつ  
ふつふ

萌えに困る状況が想像できないが、一つ問題がある。

「どうやって見んの？ この病室にはローロプレイヤーなんかないぞ？」

「その辺りの抜かりありませんぞ、この大林にお任せあれ」  
言つと大林は背中のリュックから、黒い長方形の物体を取り出した、ノートパソコンだ。

「さすがつ！ 頼りになるな」

さつそく大林のパソコンを立ち上げる。無論、壁紙は美少女キャラだつたが、もうなんとも思わない。むしろほつとする。  
とりあえず、昨日のアニメ『ラブみこ』を一話から鑑賞することにした。

記憶を失つてから初めて聞いたはずなのに聞き覚えのあるオープニング曲。

頬を伝つ熱い汁、・・・これは涙？

「・・・私達のトキメキ～熱く、こぼれぢやい～そう」

誰かが曲に合わせて口ずさんでいる。誰だ？ ・・・・この声  
は、俺？

気付くと俺は歌つていた、聞いたこともないはずなのに、そう、まるで『ラブみこ』第八話、思い出は青色吐息』で小澤マチが生き別れになつた母の子守唄を口ずさんむ様に・・・つてなんで八話の内容を知つているんだ？

「やはり何があるつ！ 」このアニメには何があるぞつ！

号泣しながら叫ぶ俺におおつと歓声を上げる大林、うあ～と本気で引く暴力女。

「なんだよ、その顔は。俺の記憶の手掛けがあるんだぞ、君も俺の記憶を戻すために来たんだろ？」

「ただけども、なんて言つた、そのための手段は選びたいじゃない？ もっとドラマチックな手段もあるでしょ？」

「どんな手段だよ？」

歯切れの悪い暴女に訊くと、なぜか彼女は赤くなりながらに歯切れ悪く取り乱し始めた。

「ええと、それは、その、なんかこう……、なんでもないつ！」

死ねつ！ キモオタツ！」

また言われた、まったく女子高生の感情はヤンデレキャラの奇行ばかりに理解できない。

とりあえず俺は周りの声を一切無視することにして、アニメに没頭した。

三時間ほど経つただろうか、第七話のオープニングが流れている。俺の脳内ではミロコ達の声がミラーハウスに迷い込んだ光の様に乱反射している。

「一日の萌え摂取量を越えていますっ！ これ以上潜ると戻つて来れなくなりますぞっ！？」

大林がせがむように俺の手を握る、今はその汗ばんだ手もまつたく気にならない。

「ダメだつ！ ここで止めるわけにはいかない！ 俺の、俺の中のゴーストが囁くんだ！ この先に、この先に答えがあるっ！」

バチンッ

「え？」

突然、ミロコの笑顔が視界から消え失せた、見ると暴女がパソコンのディスプレイを押さえ込むように閉じている。

「てつめ、何しゃがるつ！」

怒鳴る俺に暴力女は壁に架かつた時計を指差す。

「もうお昼よ、お腹空いたわ」

「別に俺はつ」

言いかけたが暴力女の睨みに怯んでしまつ、しうがなく俺は頷いた。

「でも、この時間じゃもう給食も片付けられちまつただろう」

この病院では歩ける患者は自分で給食を取りに行くのだ、まあ、

行くと言つても廊下に出されたトレイから自分の分を取つて来るだけだが。

「どうか食いに行くのか？」

訊ねる俺に暴力女は頬を染めそっぽを向きながらズイッチとバスケットを差し出した。どこから出したんだ？

「これ、作つてきたから。か、勘違いしないでよ、あたし一人で食べるつもりだつたんだけど、もつ給食ないつて言つんなら食べさせてあげないこともないわ」

「・・・いや、別に俺はいいよ。大林と食べててくれ」

途端に悲しそうな顔になる暴力女。

「いや、嘘です。頂きます、もうお腹ペコペコッ！」

遠慮したつもりだつたのだが、本当によくわからない。

バスケットを開けると中にはパン切れやらレタスやら生肉やら漬れたゆで卵やらが詰つていた。俺と大林は顔を見合わせる、ビリビリ共通の疑問を抱いているようだ。

「何これ？」

「サ、サンドイッチよつ！ 見ればわかるでしょー！」

腕を組みどこか恥ずかしそうに言う暴力女。

茶色い耳が所々に残つたパンの切れ端、バットでぶち割つて拾い集めた様なレタスの残骸、火を通した努力が微塵も感じられないピンクの豚肉、悪意が感じられるほどに殻の混入した卵のタルタルソース、その食材達がバスケットの中でこの世の終わりだと言わんばかりに混ざり合つていた。

これをサンドイッチと呼んだらサンドウイッチ伯爵はサーべル片手に暴れまわるだろう。

わかつたことが二つ、彼女はサンドイッチを見たことが無いのとハムと豚肉の区別が付いていないことだ。

達の悪い冗談かと思い暴力女を見ると期待する田代ひかりをチラ見ているではないか。どうやらこれを口に含んでもらいたいらしい。

「ほ、ほうら、大林。つまそりだぞ、先に食べろよ、たあんとお食べ、できれば全部お食べ」

「い、いやいやいやいや、先にどうぞ、きっと彼女はあなたのために早起きして作ったんですよ。それを口にするなどもっての他です。そんなやり取りをする俺達を見て暴力女の顔が見る見る悲しげになる。」

「まざい、ここで泣かれて飛び出されでもしたら非常にまざい。野朗一人の密室から少女が泣きながら飛び出してきたら、中の野朗は鬼畜扱い必至だ。今度は精神病棟に移されるかも、最悪の場合留置所だ。」

俺は覚悟を決めてパンとレタスを鷲掴み頬張った。

「う、うん！ 素材の味が生きててうまいよ」

それ以外の褒め言葉が思いつかない。当然だ、素材の味しかしないのだから・・・

暴力女の表情が見る見る明るくなり、「でしょうつ！ あたしサンドイッチは得意なのつ！ 友達もみんな泣きながらおいしそうに言つてくれたんだ」

満面の笑みでそんなことを言つている、どうやら彼女の周りはほしいぶん寛容な人間が多いらしい。その友達の気持ちが痛いほどわかる。俺も泣きそうだ。

「あたしの分はいいから全部食べてつ」

「お、おうー」

応えながら大林を横目で睨む、次はお前だ。

大林も覚悟を決めたようで、パンとレタスをそもそもと食べ始める。

「どうやら考えてる」とはいっしょらしい、まだ食えそうなパンとレタスに逃げる作戦だ。

俺と大林はパンとレタスを取り合ひつつに食べて、生肉と殻入り卵を譲り合いながら喰らいバスケットの中身をなんとか平らげた。腹の中で生肉の雑菌と卵の殻が劇的に反応して行くのがわかる、

食つても食わなくとも入院が長引くのは運命のようだ。

嫌な感じの満腹感に腹を抱えつつ、俺はアニメの鑑賞に戻ることにした。

ラブみこを見終わる頃、辺りはすっかり暗くなっていた。

大林と暴力女はとっくに帰ってしまい、薄暗い病室を大林から借りたパソコンだけが照らしていた。

ふーっと深く息を吐いて、長時間の労働に文句を言い出した田を揉んでやる。

結局、このアニメを観て得られたのは小さな感動と無駄な疲労感だけだった。最初はうまくいくと思ったのだが、虚しくも空振りに終わつたわけだ。

パソコンの電源を落とそうとして、あるファイルが目付いた。大林のパソコンのディスクトップはほとんどゲームのショートカットや怪しげなソフトで埋まっていたがそのファイルだけ、通常のフォルダのアイコンだ。

「・・・パンドラの箱？」

非常に開けにくい名前のファイルだった。開けた途端この世の全ての災いが飛び出してきたたまたものじやない、これ以上の災難はごめんだが・・・、最後の希望に賭けて見るのも悪くないかもしない。

それにこのファイル、おそらく大林が俺のために用意したものだろう。

しばらくそのファイルを見つめてみたが、大林の意図を理解できるはずもなく俺は覚悟を決めてダブルクリックした。

中にはテキストファイルが三つ入っていた。『1、始めて』『2、絶望』『3、希望』。

「・・・なんだこれ」

とりあえず、『1、始めて』をダブルクリックした。

『始めて言つておきますが、ここに書いてあることはははわたくし大林森樹の妄言ですぞ。なのでここに書いてある文章は本気にしていただきたい、それでも読みたいと思つたのなら三つのルールを守つてもらいますぞ。

一つ、絶対に他言しない。二つ、マチ様になつたつもりで読む。ルールを守つてくれる者だけに閲覧を許可しますぞ。』

「あいつ名前なんて読むんだ？ シンキ？ やたらと木偏の多い名前だな」

そんなことよりこのルール・・・三つないのは流すとして・・・内容が問題だ、他言しない、マチ様になつたつもりで・・・マチ様はラブみこの小澤マチで間違いないだろ？、しかしなつたつもりでつてなんだ。小澤マチは頭脳明晰で観察眼に長け、ラブみこでは私立探偵として登場する。

とりあえずそのファイルを閉じようとポインタを×印に持ていつたとき、違和感を感じた、本当に些細な違和感だったが俺はその正体にすぐ気が付いた、スクロールのカーソルが小さい。文章は終わっているのにカーソルはまだ下へ行けることを示している、まだ下に文章があるのか。

マウスホイールを転がして、下へスクロールしてみる、何百行も空白が続き、最後に文章が現れた。

『よく気付きましたな、流石ですぞマチ様』

三つのルールです。記憶を無くした人は「希望」を先に閲覧ください、「絶望」は最後です。』

俺は恐怖していた、この文書は明らかに読む人間を選んでいる。小澤マチは私立探偵という予備知識があつたからこそ気付けた小さな違和感、これはもう俺へのメッセージで確定だ。

恐る恐る第三のルールに従つて『3、希望』を開いてみる。

『10月14日

今日もあいつは相変わらずオッチャンとアニメの話、本当に救いよつの無いキモオタだ。人の気持ちなんてまったく考えてない。

10月15日

あいつは変わらない、このままじゃ卒業して離れ離れになってしまつ。私も待つてるだけじゃなくて、勇気を出さないと。

10月16日

大変なことになつてしまつた、私が殴つたせいであいつが記憶喪失になつた。私のせいだ、このまま記憶が戻らなかつたらどうしよう・・・

10月19日

またあそこに行つてしまつた、あいつが記憶を失つてから毎日行つてゐる。我ながらバカだと思つ、あんな所に行つてもなんの罪滅ぼしにならぬのはわかる、でもあそこに行けばいつか元気なあいつがひょこつと現れる気がして・・・』

そこで文章は終わつていた。

「・・・なんだこれ？」

誰かの日記つぽいが。あいつつてのは俺で間違いないだろう、といふことはもしかしてこれはあの暴力女の日記なのか。それにしても可愛げのない文体だ、俺でももう少し女つぽい日記を書けるだろう。

しかし、なぜ暴力女の日記が大林のパソコンに入つてゐるんだ。首を傾げながら『2、絶望』をダブルクリックした。

その瞬間、別のウインドウが立ち上がる。

「ん？　んん！？　なんだこれつ！？」

そのウインドウには消去していますと表示されている。それもほんの一瞬の間だった、画面は怪しげなショートカットが並ぶディスクトップに戻される、そしてそこにパンドラの箱の姿がない。

「おいおいおいおい、マジかよ！」

急いでゴミ箱のアイコンを開いたが、中身は空っぽ。

「どういうことだ？」

確かに『絶望』はテキストファイルだったはず、なんで『テリート』のエグゼが起動するんだ……たぶん大林だ、あいつがそのように仕込んだものだろう。もし第三のルールに気付かず『絶望』から開いていたら全てが消去されていた、『希望』は見れなかつた。

「……でもなんでここまでするんだ？」

それほどにあのパンドラの箱は重大なものだったのか、いや、重大なのは『希望』だ。大林は俺だけに『希望』を見せるためこんな手の込んだことをしたのだろう。

俺は日記の内容を思い出す。

記憶を失ったのが16日、それは日記と一致していた。

そしてあの内容の通りだとすれば俺は暴力女に殴られて記憶を失つたことになる……まあなんとなく予想はしていたが。あの内容から考えて暴力女はかなり罪の意識を感じてるようだ。別に俺は咎める気なんてない、今度会つたらしつかり話そう。

「……問題は次の日記か……くそ、はつきり覚えてねえ、大林め、やつてくれる」

大林に電話して聞こうと思つたが、消えるように仕込んだ張本人が教えてくれるわけがない。

暴力女なら知っているかもしれない、これは彼女の日記だ。

携帯電話を開いき電話帳を見て、思い出す。

俺は暴力女の名前を知らない、名前がわからなきや探しようがない、それに暴力女の電話番号が入つていてかどうかもわからないのだ。

「はは、まるで他人の携帯だな」

一人で苦笑して携帯電話をベッドの上に投げ出す。

なんとか思い出すしかない。

たしか最後の日記は19日、昨日だ。俺が記憶を失つてから暴力

女はある場所に毎日通つてゐるみたいなことが書いてあつた。どこだろう。・・・わからない。

しばらく考えてみたが思い至らず、頭を抱えたときに閃いた。

あいつが幼馴染みなら俺が覚えてる場所の可能性もあるんじゃないか。

幼馴染みなら幼少の頃の一人の思い出の場所とかに行くものじゃないのか、俺の長期記憶メディアにあいつの記録は無いが子供の頃遊んだ場所は結構覚えてる、近所の土手、帰り道の公園、駅前のコンビニ。

そういうところに行つて一人で黄昏てるのかもしれない。アニメやドラマの定番だ。

夜の公園で一人、ブランコに乗つて涙を流す暴力女の画が脳裏に浮かんだ、そして後ろから暴漢に襲われる、暴れる暴力女、しかし女の力では男に敵うわけもなく、無理矢理茂みに連れ込まれて・・・。

「いかん、いかん」

無駄に活性化する思春期の妄想を振り払う。しかしそう思うと少し心配になってきた、あの日記を信じるなら暴力女がどこかに通つているのは確かだ、もし時間帯が夜だったら少女の一人歩きは危険過ぎる。

俺の脳内でまた暴力女が襲われ始めた。

「くそ、なんだってんだ」

俺は息を切らして入院服にスリッパのままで寒空の下を疾走していた。

心配し過ぎなのはわかってる、だがもしものことを考えると居ても立つても居られなかつた。

「上着ぐらい持つてくれればよかつたなあ」

しかし取りに戻るわけにもいかない。隠れるようになんとか病院から脱走したのだ、もし戻つて捕まつたりしたら間違いなく精神病

棟行きだろう。諦めて走り続ける。

病院の広場を抜けて門を軸にして回転するように右に曲がったとき、

「あっ！ ちょっと！」

不意に後ろから声が掛かる、俺は飛び出しそうな心臓を抑え振り返らず全力で走った。

あんなところにいるのは間違いなく病院関係者だろ？ これで俺の脱走がバレた、下手すりや警察だな。

「引き返すか、今ならまだ間に合つ」

そんな考えが浮かんできたが暴行されてる暴力女を思えば邪念は一発で吹き飛んだ。

まずは近場の公園からだ。そこは小学生の頃よく遊んだ記憶がある、俺のお気に入りは砂場だった、昔から身体を動かすことよりも頭や手先を動かす方が好きだった。

まだそんなに遅い時間じやないらしく何人か通行人とすれ違った、その度に俺は速度を落として「ランニングしますよ」みたいな雰囲気を醸し出してやり過ごす。「どうもお」なんて頭を下げたりもした。実際にこれでやり過ぎせるのかは疑問だが、全速力で過ぎ去るよりはマシだろう。

三組目のカップルに嘲笑された頃、ようやく公園に辿り着いた。肺がズキズキと酸素を要求してくる、運動不足の身体は完全にオーバーヒートしていた、さっき感じた寒さなど完全に吹き飛んでいる。十分も走つてないのに我ながら情けない。

肩で呼吸しながら公園を見渡すが人影はない、茂みやトイレまで細かく確認したが誰もいなかつた。

「ハズレか」

落胆するべきなのか喜ぶべきなのか複雑な気持ちで去りうとしたとき、滑り台が目付いた。

「なんか懐かしいな」

近付きながら滑り台を見上げた、その瞬間。

『ほらあ、あんたも来なさいよ』

頭の中で響くような声が聞こえた。

見ると少女が『王立ちで滑り台の上に立っていた、文字通りこちらを見下している。』

『ええ、やだよお、危ないって、降りてきても』

何処から不安そうな少年の声がする。

『あんた男でしょ！ しつかりしなさい！ いい？ 見てなさいよお』

少女は言つと膝を曲げ、滑り台から飛び降りた。

『ああー！』と叫ぶ少年。

少女は着地するが勢い余つて膝をぶつけてしまつ、両膝は擦り剥け、少量の血が滲んでいる。

『大丈夫っ！？ 血が出てるよー！』

少女は膝を押さえてプルプル震えているが、すぐに『王立ちに戻り両手を腰にあてる。』

『ど、どう？ 憂いでしょ？ あたしが飛んだんだから、あんたもこのぐらい飛べなきゃダメよ』

気丈に振舞つてゐるがその瞳には小さな涙が浮かんでいた。

『凄いよ！ 痛くないの！？ ・・・・でも僕はできないよ、

ちやんとは違うもん』

少女は呆れたような、悲しいような、複雑な表情を浮かべて、「ふん」と鼻を鳴らして去ろうとする。

俺は咄嗟に少女を追いかけよつとした、しかしそこには暗い公園の寒々しい風景があるだけだった。

「・・・・なんだ？」

頭を押されてその場に座り込む。

「なんなんだ今のは、幻覚か？ いよいよ俺やばいのかな・・・」

異常にぼやけて見えた幻覚。

「幻覚つてあんなものなのか、あんなにぼやけて見えるものなのかな

？ いや、違う・・・』

勿論、幻覚なんて見たことないが、あれは幻覚なんかじゃないと断言できる。説明できないがもつと純粹な愉しい気持ち。

そうだ、あの少年の声は俺の声。あれは俺が体験した場面なんだ、

俺は一瞬だが何かを思い出したんだ。

「 ちゃんとは違うもん？ ・・・誰だ？ ちゃん？

？」

言葉にならない”ちゃん”の前部を繰り返す。しかしその部分だけがはつきりしない。まるで離れたところから囁かれているようなか細い声。

「くそつ、思い出せない、俺は何ちゃんと呼んだんだ？ あの子は誰ちゃんなんだ！」

ぼやけた記憶は戻りそうにない、俺は諦め頭を振つて走り出す。次は土手だ、中学校の帰りによくそこで夕日を眺めながら散歩していた、しかしそれは建前で実際は捨てられた工口本を探してうろうろしてただけだ。

三十分ぐらい走つただろうか、もはや俺の身体は限界で自分でも走つてゐるのか歩いてるのかわからない。

強烈な眩暈と吐き気に襲われて転倒した、仰向けになり空を見上げる。

淀んだ大気には寂しげに月がぽつんと浮かんでいた、その月に巨大な雲が覆いかぶさる、その様は巨大な暴漢に襲われる小さな少女を彷彿とさせる。

俺は震える膝を殴りつけ立ち上がった。暴力女は今も助けを求めてるかもしれないのだ、こんなところでくたばってるわけにはいかない。

ようやく土手に到着した。一時間以上走つた気がするが実際は二十分も走つていなかつた。

千鳥足で土手の斜面を降りる。

公園と違ひ外灯が少く、十メートル先も満足に見えない。

端から端まで歩くしかない、逸る気持ちとそれに反発する身体を

引きずるよつに駆け出した。

しばらく走つていると奥の方に灯りが見えた、橋の真下だ。その灯りに吸い寄せられるように歩いていく、近づくそこには小学生の頃作つた秘密基地の様なダンボールの塊が見えた、その中から弱い光と人の声が漏れている。

「いいなあ、たまらんna、若い女はいい。セーラー服つてのは脱ぐためにあるんだな」

その声に俺は最悪の事態を想像した、学校帰りの暴力女が土手で黄昏てるところをホームレスに捕らえられ、このダンボール小屋の中でもつてけ！セーラー服状態に・・・。

足元に落ちていたビール瓶を握り、俺は小屋に突入した。

「え？」

小屋の中にはボロを纏つた中年の男が一人で座り込んでいた、男は驚愕の表情で俺を見つめて手元の本を落とす。

その本にはセーラー服の少女があわれもない姿で写っていた。

痛恨の勘違い、会心の早とちりとも言える。

「あ・・・、あのお、この辺で高校生ぐらいの女の子見かけませんでしたか？」

俺は失態を誤魔化すように訊ねる。我ながら良い切り替えだ、これなら隠蔽と情報収集の二つを同時に得られる。

「いや、見てねえけど・・・、なんだアンちゃん、そんな格好で？」  
男は戸惑いながらも答える。

「そうですか・・・、ならいいんです。すいません、失礼しました」  
去ろうとすると後ろから声が掛かる。

「待て待て、アンちゃん。この間にそんな格好でうろつくなんて、まさか・・・アンちゃん」  
ギクッとする。

「エロ本探しか？ そうだろ？ そうに決まってる、間違いねえ」  
「違います」

即答した。入院服でビール瓶片手に土手にいる男はエロ本探しの

男と断言できる根拠を知りたい。

「まあまあ、恥ずかしがることあねえ。男だつたら誰でも一度は宝物を探して夜な夜な冒険に出かけるもんさ・・・、俺もアンちゃんぐらいのときはそりゃもう

男の息からはアルコールの臭いがする、こんなところで酔っ払いの相手をしている暇はない。

「急ぎますので失礼します」

その時、男は「ほれっ」と俺に向かつて何かを投げた。

キヤツチしたそれはさっきまで男が読んでいたエロ本だつた。

「それは餓別だ、とつとけ。俺みたいな年寄りよりアンちゃんが持つてた方が役立つだろ?」

その表紙を見た途端、また過去の記憶が蘇る。

『ちょっとお、早く帰ろつよ!』

夕日に染まる土手の上から少女が怒鳴つている。

『先に帰つてろよ! 俺はもう少し探してみる』

俺は藪を漁りながら言い返す。

『だ・か・ら、何探してんのよ?』

『あつたぞ!』

見つけた物を掲げて歓喜の声を上げる俺。

『・・・何それ?』

土手の斜面を降りながら訊いて来る少女。

『いや、何つてエロ・・・成人向け雑誌だよ』

きつつい目で俺を睨んで少女が言い放つ。

『最つ低!』

『バツカ、俺ぐらいの年齢の勇者は誰しも宝物を求めて冒険に出かけるもんなんだよ、わかる? おい、無視すんなよ、おい! 待て

つて』

そっぽを向き、足早に去るとする少女を俺は宝物片手に追いかける。

その後、獲得した宝物を捨てるまで口を聞いてもらえなかつたん

だ。

「おい、アンちゃん。大丈夫か？」

心配そうな男の声で俺は回想から戻った。

俺は手に持った宝物を見て不敵に笑い、

「ありがとうございます」

お礼を言つて小屋から出る、後ろから「がんばり過ぎるなよー、

アンちゃん！」と男の声に手を上げて応え土手を後にした。

土手にあいつはいない、俺の知つてゐるあいつは一人で黄昏のよう  
なベタなことはしないし、暴漢に襲われるなんてこともありえない。  
そんな確信が俺にはあった。

病院に戻ろう。でもその前にやることがある。手元の装備を確認  
する、ビール瓶とエロ本、ひのきの棒と鍋の蓋より頼りない装備だ。  
これを処分しなくては、あのときみたいに・・・。

俺の足取りは軽かつた、不安は消え去り、明確な目的地を見出せ  
たからだろう。

しばらく街中を歩くとコンビニが見えた、そのマリ箱に宝物とビ  
ール瓶を捨てる。

あのときもこのコンビニで拾った宝物を処分した、かなり名残惜  
しかつたが、捨てるとすぐにあいつは「許す！」と微笑んでくれ  
た。

あいつの家は空手の道場で、あいつ自身も段持ちだ。

あいつはガキの頃から我がままでいつも俺を困らせた。

あいつは高校に入つてすぐ「告白された」と俺に相談してきた、  
俺は内心驚愕していたが興味ないふりをして誤魔化した、あのとき  
あいつは悲しそうな顔をしていた。  
そんなあいつの名は・・・・・。

病院に戻ると門の辺りに人影が見えた、塀に背預け所在なさそう  
に俯いている。

学校指定の白いジャージに男みたいなショートヘアはオシャレ  
心ゼロ、きつついツリ田は悲しそうに地面を見つめる。

あいつだ。

「もしかして……、通つてるのはここだつたのかよ！？」  
俺は自分の無駄過ぎる努力に驚愕した、驚きながらも駆け出して  
いた。

彼女も俺に気付いたようで驚いた顔をしている。

その時、彼女の横の電柱から中年の大男がヌウッと出てきた。  
「なつ！？」

彼女は気付いてない、いくら段持ちの彼女でもある大男は倒せない。

俺はそのまま加速し大男に突進する。

「どおりやあああ！」

そして飛びあがり、ドロップキックを大男の顔面にお見舞いして  
やつた。

「ぐつふうううー！」

聞き覚えのある奇声を漏らし、大男は吹き飛んだ。

そのまま転がっていく大男にビシッと指を差し、

「蛮行は二次元だけにしなつ！ 变態野郎」

言い捨てた。

決まつた。今の俺、ちょっとカッコいいかも、チラッと横で震える彼女を見た瞬間、  
に転がる。  
「何してんのよつ！？」  
殴られた、顔面に正拳がめり込む。そのまま振り抜かれ大男の脇に転がる。

わけがわからない、わかるのは右頬の痛みのみ。

「大丈夫！？ オッチャン！？」

彼女は俺の横で倒れている大男に駆け寄つた。

「オッチャン！？」

俺は頬を擦りながら驚く、そんな俺に大男は体を起こしながら言

う。

「酷いですぞ・・・、二次元でも鬼畜物には手を出していいのこ・・・」

・・・

そんな台詞の主は紛れもなく大林だった。

「いや、オッチャンだったのか！ すまん！ またも早とちった！」

両手を合わせ頭を下げる俺。

「いやいや、もういいですぞ。頭を上げてください」

「本当にすまん。それよりなんでお前までここにいるんだ？」

大林はその問い合わせず不敵に笑う。

首を傾げる俺を彼女が無理矢理立たせて詰め寄ってくる。

「あんた何してんのよ！？ サっき声掛けたのに逃げたでしょ！？」

なるほど、病院から出るときの声は彼女だったのか。

「何つて、お前が毎日どうかに通つてるつて言つから心配で探しに・・・」

「はあ！？ あたしが何処に通つてのよ？」

「お前自分の日記に書いただろ？ あつ」

しきつた・・・。オッチャンのパンドラの箱のルールだ、『他言しない』。

しきつとあれはオッチャンが彼女の日記を押借したものなんだ、自分の日記を盗み見されたとわかつたら彼女は怒り狂つてしまつ。何かうまい弁解はないかと考えていると彼女は怪訝そうな顔で、『日記い？ そんなもん書いたことないわよ』

そんなことを言つてきた。混乱しきつた俺はもう何が何やらわからぬ。

「え！？ ジやあ、あれは・・・」

「ぐつ ふつ ふつ ふつ ふ」

驚く俺の横でオッチャンが不気味な笑い声を上げる。

「書いてあつたでしょ？ あれは全てわたくしの妄言だつて」

「もしかして・・・」

「全てファイクション、でたらめですぞ。いや、一部は事実ですが」  
さらに驚いた、驚愕なんてものじゃない。もはや完璧に理解不能だ。

そんな俺の心境を知つてか、オッチャンは説明を始める。  
「あのファイルの『希望』を見れば、あなたがある結論に行き着くだろうと思つてました。思い出の場所に行つて来たんでしょう？  
ベタですが、過去の思い出の場所に行けば記憶が戻ると思つたんです」

一分ほどオッチャンの言葉を咀嚼してようやく理解できた、ようするに俺はオッチャンの手の上で踊らされていたわけだ。

「・・・なるほどな、でもだつたら他の伝え方もあるだろ？　あの方法は効率悪いんじやないか？」

「あなたの方法が良いのですぞ、あなたが必死になつて自分から考へて動かないと。ファイルを消えるようにしたのはあなたに危機感アリティを「」えるためです」

「ちょっと！　何の話よ！」

沈黙を守つていた彼女が痺れを切らす、しかしオッチャンはまあとなだめて続ける。

「彼女はわたくしが連れてきたんですけど。策がうまくいった暁にはお互い積もる話もあるでしょうしね。そしてここが『ゴール』というわけです、その様子だとわたくしの策はうまくいったようですね」  
俺は笑みで答える、オッチャンも満足そうに頷いた。

その場で一人不満そうなあいつに正対しその目を見つめる。

「何よつ！」と彼女は戸惑つたように目を逸らす。

「あのときは悪かったな、はぐらかして」

小首を傾げる彼女に俺は淡々と言つ。

「あのときは、ほら、突然で俺も混乱してたからだ」

「は？　だから何の話よ！？」

「学校の帰り道の続きだよ、記憶を失う直前の話だ」

最初は怪訝そうだつた彼女の顔色がどんどん変化していく。

「記憶が戻ったの！？」

「ああ」と答えると彼女はその場に力なく座り込み泣き出してしまつた。

「よかつたあ、本当によかつたよおー。あのまま戻らなかつたらあたし、あたし・・・、本当によかつたあー」

嗚咽混じりで絞り出すように喋る彼女、俺は狼狽してしまつた。驚いた、こいつのこんな露骨な泣き顔なんて初めて見るかもしない。そんな俺達の様子を孫の成長を見守る老人の様な達観した表情で見つめるオツチャンが「他に言つことがあるでしょう」と耳元で囁いてくる。

お見通しだな、そうだ、こいつはかなりのオタクだが計り知れない知能を持つ男だつた。記憶を失う前もこいつに何回助けられたかわからない。しかし今はオツチャンへの謝礼よりも目の前で泣き崩れる少女に言わなければならないことがある。

「それで・・・返事なんだけどな」

息を吸つて彼女を見つめる。そして、

「ごめんなさい」

頭を下げた。

彼女はしばらく呆けたように俺を見つめた後、唇を一文字に結んで立ち上がつた。

「うん・・・うん・・・。でも理由を聞かせてよ」

小刻みに震える声で訊いてくる、その顔は笑顔だがとても悲しそうに見えた。

そんな強く優しい彼女をとても愛しく感じたが、この結論は変わらない。ずっと前から決めていた。

「俺はオタクだ」

呴く俺、その言葉が聞こえたのか聞こえないのか不思議そうな顔で彼女は見つめてくる。

「俺はアニメオタクだ」

今度は聞こえたようだ、怒つたような悲しいような複雑な表情の

彼女。オッチャンも驚いた顔をしている。

「俺はロリータ大好きの十七歳……、ギャルゲー、エロゲーなんでも来い。かわいいおんにやの子が出来るものは全て愛せる。〃口コたん萌え、萌え、萌ええ……」

彼女は俯き俺の声と同じくらい震えていた、あのときと同じだ、怒っているのか泣いているのか。しかし今回は拳が飛んで来なかつた。

この続きを言つてしまつたら全てが終わる、だが言わなくてはいけない。言つたために俺の記憶は戻つたのだから。彼女を見つめて覚悟を決める。

「……そんな俺はお前に相応しくない、もつといい男を探せよ」  
目に熱いものが込み上げてくる、必死に瞳と歯を食い縛りながら唇の両端を上げる。自分でも悲痛な笑顔だとわかる、しかし泣き顔なんて見せるわけにはいかない。

目を閉じているので彼女の顔はわからない、しばらく経つてから彼女の声が聞こえてきた。

「……ゲーム、覚えてる?」

「ゲーム? そういうえば、そんなものあつたな。確か一週間以内に彼女の名前を思い出すとか。

顔全体を食い縛つたままで首を縦に振る。

「あたしの名前は?」

急に明るくなつた彼女の声、俺は思わず目を開けた。その顔は天真爛漫、まるでどびつきりの悪戯を思いついた少年のよつて輝いていた。

「……舞?」

質問に答えるといつも呼びかけるよつて彼女の名を呟いた。

「正解つ! あたしの勝ちね!」

わあつと両手を合わせて喜ぶ舞、その豹変ぶりに俺は頭を傾げる  
ことしかできない。

「じゃあ、勝者への褒美も覚えてるわよねえ?」

「…と笑う彼女。確か敗者は勝者の命令に絶対服従という条件だったはずだ、じわじわと恐怖が登つてくる。舞のことを知つていればこんな恐ろしい条件飲まなかつたのに。こいつは校内ダンシングマジックネスで狂氣乱舞と呼ばれていてその名を知らない者はいない程に恐れられている。ラグビー部にアメフトの装具で殴りこめとか、剣道部にフヨンシングの装具で殴りこめとか、文芸部に天文学部の装具で殴りこめとか言われかねない。・・・いや、最後のはできそだな。

「それじゃあ・・・・・・」

たつぶり間を開ける舞、その間は俺の怯えを楽しむためのものじやなく、舞自身が躊躇つてゐるようだ。

「あたしと付き合いなさい！　これは命令よつ！」

予想外の言葉に俺の思考は混乱する。

あたしと突き合つ？　汝、我と戦えつて意味だろつか？　いや違う。勝負にならない、瞬獄殺のTKOで俺が屠られる。

消去法で可能性を消して最後に残つたものがどんなにありえないものでも事実だつていう探偵がいたな。無理が通れば道理が引っ込む、その理屈で考えると。

「えーと、何だ。つまりお前と俺でカツプル、もしくはアベックと呼ばれる集合体になりませんかつて意味？」

「・・・・・う」

ボソソと叫ぶ舞、その顔は夕日の様に真つ赤に染まつていた。

「・・・・・・・・・・えつ？」

少し落ち着いて整理してみよつ。

俺は舞に告白された、俺は誤魔化した言い方をして舞に殴られ記憶を失つた、そして記憶が戻つてからはつきり返事をした、しかし舞は絶対的優位な外交カードを使って、拒絶不可の告白を行つた・・・。

俺の考え方抜いて出した解答を無視して、この女はそんなトンデモナイコトヲオツシヤツタノデスカ？

「いやいやいやいやいや、ちょっと落ち着け。クールに行こう

ぜ、ブラザー。俺はお前のことと思つて返事したんだぜ？ お前のこと嫌いなわけじゃない。お前にはもつと相応しい男がいると思うんだ、だから俺みたいなダメ人間とくつ付いちやダメだ。OK？」「・・・うつさいわね。あんたに心配されなくとも自分の彼氏くらい自分で見つけるわよ、って言つたか見つけたわよ。言つとくけど断る事はできないわよ、命令なんだから」

舞は腕を組み仁王立ちでそつぽを向く、もつまにも言つ事はないらしい。

口をぱくぱくさせていると肩をオッチャンに叩かれた。

「観念した方がいいですね、年貢の納め時ですぞ。いやあ、若いつていいですなあ～、ぐつふつふつふ」

「こうなることを確信してたのだろう満足そうに笑う。そんなオッチャンと舞を交互に見て、

「やれやれだよ」

と俺は自嘲気味に笑つた。

空を仰ぐと雲は霧散し、大きな月が俺達三人を照らしていた。

突然の記憶の復活を疑つ病院を半ば無理矢理退院した、その翌日、俺はいつも変わらない登校風景の中にいた。

こうして見ると記憶を失つていたあの四日間はまさに幻のようだ。あの四日間は今までの人生で一等奇抜で一番充実していた、しかし今俺は普通のオタクの高校生だ。不思議なもので少し寂しく感じる。

小学生の頃は早く大人になりたいなんて思つたものだが、今は幼かつたあの頃に戻りたいと心から思う、そんな感覚に似ている。

そんなことを考えていると突然後ろから「やあっ！」と言つ掛け声と共に激しい衝撃、俺は前にすつ飛ばされた。遅れてじわじわと背中に鈍い痛みが広がる。

「いつてえな！」

見ると舞が正拳突きの構えで立つてた。

「あんたなんで先に行つちやうのよつ！？」

「どうやら俺が一人で登校したことが不満らしい。

「いつもバラバラに登校してんだろ？」

背中を擦りながら応じる、舞は「そつだけどせ」と呴きながら横目で脇を通り過ぎる楽しそうなカツプルを見ている。

「何、もしかしてあんな風に仲良く登校したかったのか？」

冷やかす俺を見て舞は見る見る赤くなり拳を振り上げた。

「ちよつ、おい、これでも俺は病み上がりだぞ！」

「うつせー！ 死ねつ！」

拳を振り下ろしたその時、

「いやー、朝からアツアツですなあ。ひゅうひゅう」と声がする、舞の拳は俺の顔面ぎりぎりで止まった。

見るとオッチャンが自転車に乗つて近づいてくる。

「まつたく、見てるこつちが恥ずかしくなるシンデレぶり、これで暴力的じやなかつたらリアルメイリンたんですね。いやあ、良い彼女じゃないですか」

周囲には通学中に生徒がわんさかいるのに大声でそんなことを言うオチャン。舞は俯きフルフル震えている、もはやお決まりとなつた舞の姿だが今回は人体の限界を遥かに超えた顔の赤さだ、その様は怒り狂つた赤鬼という比喩がぴつたりだろう。

ちなみにみメイリンとはラブみこに登場するシンデレキヤラだ。

「そついえば昨日から始まつたマジキヤルギヤールズにも似たようなキヤラがいましたなあ、えーと確かあ

次の瞬間、舞が視界から消えた、気が付くとオッチャンは自転車ごと宙を舞つてている。舞のひつさつわざ『むげんとうぶ』だ。そして

「ナナミたあんつ！？」

オッチャンはマジキヤルギヤールズに登場するシンデレキヤラの名を叫びながら地面に激突。

「うわあ、今頭から落ちたぞ、大丈夫なのか

舞をなだめながらオッチャンに近づく、我に帰つた舞も心配そうに駆け寄ってきた。

オッチャンは唸りながら頭を抑え起き上がつた、見た目通りタフな男だ。安堵する俺と舞。

しかしどこかオッチャンの様子は変だ、辺りをキヨロキヨロと見渡している。そして俺達を見据えて、

「・・・はて、ここはどこ？ 私は誰？」

などとのたまつた。

その台詞に俺と舞は顔を見合わせ凍りつく。

「マジかよ・・・」

オタクのキオクが脆いのか、舞の拳には人のキオクを失くす属性があるのか。

そんなことを考えながら俺は今、オッチャン宛ての『パンドラの箱』を書いている。

(後書き)

作者と読者、両方が楽しめるように書きました。  
楽しんで貰えたなら、嬉しいです。  
評価、感想、アドバイス等もらえた日には小躍ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1652d/>

---

オタクのキオク

2010年10月8日15時54分発行